

503

天魔両軍の決戦

ハルマゲドン

特 240

878

軍著



神飛之日本社刊



始



特240
878

今後の世界はどうかなる？

日本及び世界の将来を豫言するの書

知識階級及び労働者一般階級を通じて、日本人である限り、すべての人が讀み盡さるべき書。

今や第二次世界大戦來は日常の常套語と化しつゝある。吾人は更に、今後の世界はいかに落付くべきかに焦心し、腐心する。この未曾有の火急時に於てこの困難なる問題について明快なる裁斷を下したのがこの書である。この書を読んで初めて吾人は日本の眞使命を體得し、安心して更に一層の勇猛心を以て時局に處することが出來やう。敢て非常時下の全日本人の一讀を乞ふ。

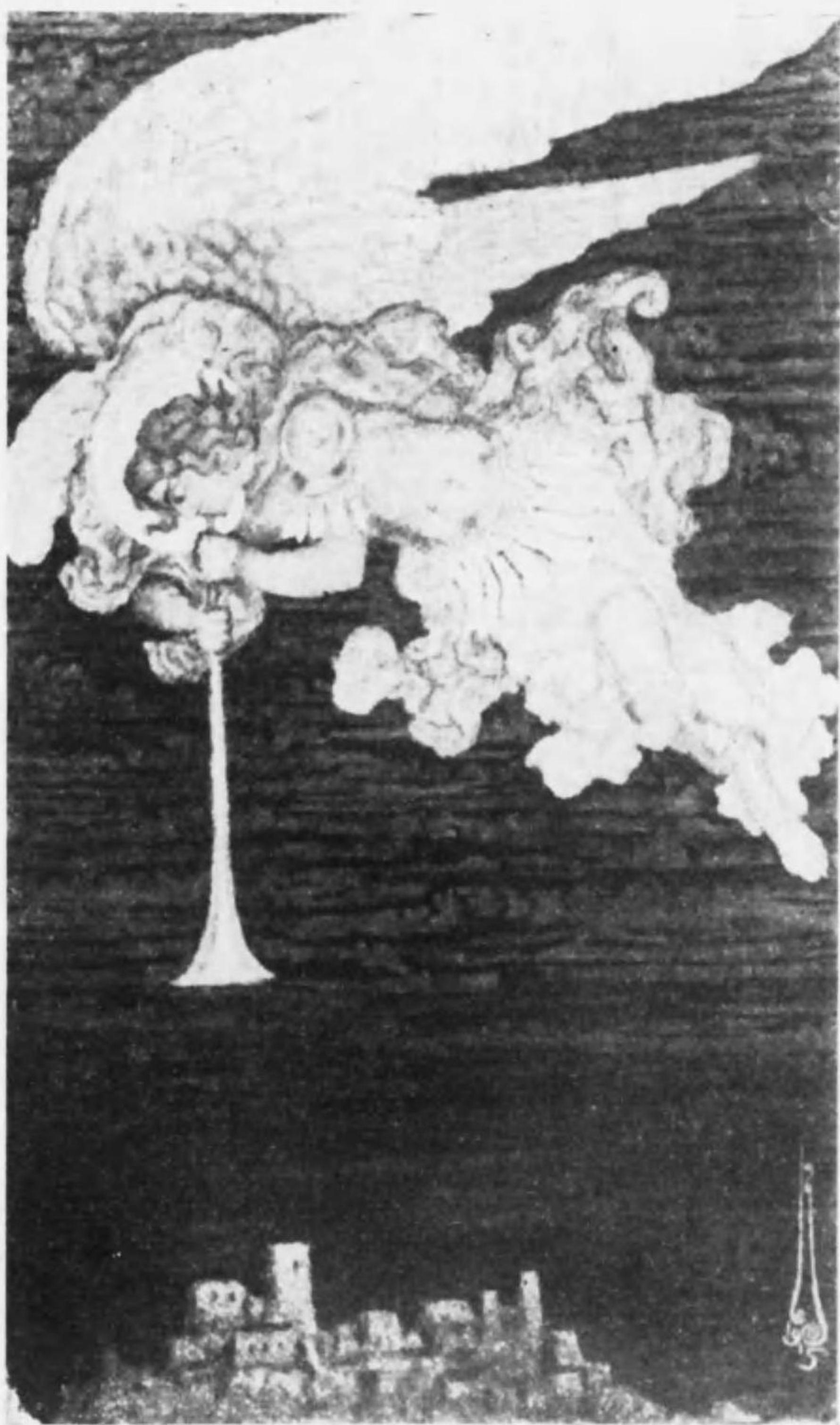
酒井勝軍先生著

定價十五錢（送料三錢）

發行所・東京市世田谷區代田二ノ一〇五一
神祕之日本社・振替東京一二三三九四番



酒井勝軍先生の肖像



天軍勝利の其時

天魔兩軍ハルマゲドン目次



ハルマゲドン戦の其日
天軍勝利の其時

第一幕 三番 叟

第二幕 其前期戦

—— 中 入 ——

第三幕 其後期戦

第四幕 天軍の凱旋



天魔兩軍の決戦・ハルマゲドン

酒井勝軍述

第壹幕 三 番 叟

人性は本善か、又は本悪かなどを云々する雑論は支那あたりの學者に任せて置けばよろしいので、我等人類は毎日毎日善玉であつたか悪玉であつたかを先づ反省すべきである。

併し善玉とか悪玉とかは人生の事實から著しく劇化されたものであるから、勸善懲惡を筋書として人生を綴ることは無理である。何故なれば、善といひ、惡といふも之は時と所と人とに由りての公約に由るものであつて、永久不變、萬民一律とすることは不可能であるためである。

そこで善悪といふ倫理層からモ少し向上して、天地の公道圏に到達すると、その公道こそ人生の軌道で、此軌道上には公義の外何物もなく従つて私利を追ふ者は倫理層を踏み外つて邪道に落ちることになつて居る。

されば有神論とか無神論とかの混合戦は、天地の公道上には全く見聞されぬことであらう。即ち道(コトバ)の世界であり、亦言挙げする必要のない神境である。

而して天地の間に人類が出現して以來、天魔兩軍の間にも人類征服のため争闘が始まつたわけで、従つて人間は誕生早々自主といふ立場を奪はれ、天軍の陣頭に立つか魔軍の旗下に立つかを強制されるのである。故に自己といふものを徹底的に地上に存在させた者は古今東西一人も無い筈であるから「おれが」などとエラそうなことを言ふ前に、自分の居る所は天軍の陣地であるか、將た魔軍の陣地であるか位をハッキリ見定めて置くのが賢明である。

併しながら、天魔兩軍の戦争が決戦とならない間は、大抵な人は自分を舞臺から勝

手に離して、見物席で観劇するやうな気分になり切るので、眞鍮味の人生に接觸せず終るやうであるが、此等は無意識に魔軍のために後方勤務をやつて居るものと見ねばならぬから、各人は深く反省せねばならぬ。

尙ほ、天魔兩軍の決戦が始まつた以上、敵は敵、味方は味方で、自分で任意に其陣地を變更するといふわけには行かぬから、平生の心得こそ大切であつて、今更悔んでも詮なく自業自得の外はないのである。

であるから天魔兩軍の決戦は、世界人類の罪惡精算日であるわけで、之を「世の終末日」ともいふのであるが、世の終末日といふても地球の滅亡ではなく、今日まで永らく建造して來た人類の虚偽文化史の崩壊である。故に之を世界の維新革命とも呼び猶太教や、基督教では神政復古ともいふて、其日其時の來ることを鶴首して居るのである。

實際誰が何といふても、此世界は神と惡魔との戦場で、勝敗は時に由りて變りはず

るが、天魔兩軍の決戦となると天軍の勝利は已定の事實となるのであるから、一層平生の心掛が肝要である。

而して此天魔兩軍の決戦が終つて天軍の勝利に歸するまでは、地上には絶対に平和といふものは出現しないのである。故に若し此間に於て平和を高唱するものが有るとすれば、それは天軍の聲ではなくして、魔軍が天軍に對する妥協苟合か、否らざれば天軍を油断せしめて魔軍の進撃に便を計らんとするものであることを忘れてはならぬ。蓋し魔軍の存在する限り平和といふものは成立する筈はないからである。

適例を挙げれば、神政復古を旗印とし「いと高きところには榮光神にあれ、地には平安、人には恩澤あれ」の軍歌を高唱すべく出現し「アーメン」を號んで天地人合一を目標とする基督教の主戦教を、悪魔は巧妙に之を逆宣傳して、基督教を以て社會主義であり、平和主義であり、博愛主義であるが如く非戦教として歐米人間に普及せしめたのである。

四

之が即ち天魔兩軍の作戦計畫が入り亂れた結果であつて、天軍は如何なる場合にも正々堂々の陣を張り斷じて卑劣な奸計に出づることは無いが、悪魔は目的のためには手段を選ばぬから、偽裝天軍、假裝天兵などを以て天軍を欺かんとするので、彼の手兵ともいふべきフリーメーソンを基督教なりと標榜し、所謂羊頭を掲げて狗肉を賣る奸策に出でたのである。

かの三の靈、諸王だちをへブルの音にてハルマゲドンと呼ぶところに集めたり。

(ヨハネ黙示録第十六章十六節)

右の一句は天魔兩軍の決戦場を明示したものであるが、此ハルマゲドンといふ語は今日まで約一千八百五十年間全く廢語であつたほど從來の基督教會が無關心否之を敬遠して居つたので、而も此ヨハネ黙示録は基督教の眞髓で、バイブルの中最も尊重すべきものであるに係はらず、基督教會では全く之を不用視して居るが如き觀があつたのは、第一の理由としては讀んでも難解であるためではあるが、實は之を讀まねばな

五

らぬ時機が到來しなかつたといはねばならぬ。

元來、ハルマゲドンといふ名稱は、今日までヘブル語とばかり信じられて居つて、ヘブル語で、ハルは原であるからマゲドの原といふことになり、世界的關ヶ原の意義であり、此マゲドの原で天魔兩軍が決戦することを豫言したものである。

而して此マゲドの原といふのは、地中海の東岸に在るパレスタイン、猶太人はイズレルの國といふて居るが、其北部に横はる一區域で、パレスタインでは最も肥沃の地方であるが、戰場としては萬國史上最も數多く戰場となつたところであるから、天魔兩軍の決戦地としては最も適當な所と言ひ得るのである。

然るにハルマゲドンは天魔兩軍の決戦であつて、世界的維新革命であり、其結果は天軍の勝利となつて、世界統一神政復古が實現されるのであるから、民族戦争でもなければ人種戦争でもなければ、國際戦争でもなければ宗教戦争でもなく、實にテオクラシイ（神政又は皇政）とデモクラシイ（魔政又は民政）との決戦である。

であるから何國と何國との戦争といふべきものではないが、天軍を代表する國と、魔軍を代表する國とが、主役を演ずることは當然の事であるから面白くなつて來たのである。

然らばハルマゲドンは何年何月に實現すべきかといふに、それは恰も盜人が來る如くに来るといふので、其日其時は何人にも豫知し得ないことではあるが、其日其時の接近するにつれて、其前兆といふものが出現するので、能く注意して居るものには自然に感ぜられるのである。

そこで、此ハルマゲドンが近き將來に實現するといふことを暗示した所謂前兆といふべきものとして今日第一に數へうべきことは、佛國のナポレオンが、全歐帝國を夢み、全世界の猶太人を之に利用せんとして、千八百六年七月二十六日、全世界の猶太人代表者百十一名を、巴里市廳の樓上に召集したことである。

猶太聖典に由ると、世界統一、神政復古の第一前兆として、全世界に散在する猶太

八
人が祖國パレスタインに復歸するといふことになつて居るから、約二千五百年間亡國民として流浪の生活を續け、同胞相遇ふも言語通せざるほどまでの逆境に呻吟した此神選民族が、今や一堂に會してサンヒドリム（猶太最高會議）を開くべき機會に遭遇したといふことは、全く一陽來復を意味したものであつて、近き將來に祖國復興が必ず實現されると感知したのである。

宜なる哉。同世紀の將に終らんとする頃に於て、イズラエル同盟起り、次いでシオン運動が現はれ、猶太人の世界的結束が愈々強大となつた結果、遂に英・米・獨の三ヶ國間に三ABC鐵道政策なるものが計畫されたのであるが、英國の三C政策と、獨逸の三B政策との正面衝突が斯くて避くべからざるものとなつた。

而して此三ABC政策を提げ、英・米・獨の三國を自己の藥籠の中に入れての大運動を敢へてしたのは、即ち神選民族と稱する猶太人であつたことを忘れてはならぬ。

成るほど歐羅巴諸國の人々から見たら、猶太人は世界覆滅の大毒魔とも見へるであ

らうが、天軍から見れば、歐羅巴諸國は悉く天軍を欺く僞基督教國で、此等の諸國を崩壊することが世界統一、神政復古上當然の先決問題であるから、猶太人はナポレオンに利用されつゝ、實はナポレオンを利用して歐羅巴の所謂列強の崩壊を計畫したのである。

若し彼の英國が「わが領土には太陽没することなし」と傲語した如く、他の歐羅巴諸國が列強の名の下に競ふて横暴を振ふて居つたとしたら、我日本は到底浮ぶ瀬が無かつたのである。然るに魔軍の進出其極に達したと見るや、俄然天軍の奇計其效を奏して、茲に天魔兩軍の決戦が突如出現することになつた。

然らば天魔兩軍が今日まで如何なる陣容で地上に活動したかといふに、天軍は五大洲を擧げて之を月の國と稱し、日の國の政權の下に之を統一せんとするに對し、魔軍は個人主義の建前から成るべく多くの國を起し群雄割據の機構に置き、地上に一日も平和なからしめんと企てたもので、バイブルには日の國をシオン、月の國をエルサレ

一〇
ムと呼び、日の國と月の國と相呼應し同一目的に向つて並行列進するため各同一設計を造營したのが、日本では平安城、猶太ではエルサレムであつた。

そこで日本は世界統治者であるから、其國民は天孫民族を以て合致し、猶太人は世界統一者であるから、其民族は準天孫民族を以て遇せらるゝ神選民族で團結して居る。そして其徽章は共に同一の物であるが、日本では之を龍目紋と呼び、猶太ではダビデ章と稱して居るけれども、元來之は日本の神代文字のト又は十であつて、天孫民族の義を有するものである。

されば世界の大事を達観する明があれば、日本と猶太とは全く同一の筋書で綴られて居ることを發見するから、此兩者の動きを見て居ると、世界統一、神政復古を實現せしむる天魔兩軍の決戦の日が大抵見當が附くのである。

それに、此兩者の筋書は千二百六十の數で計算されることが多いから、日本では神武天皇紀元から一千二百六十の年を數へると聖德太子の憲法十七條の發布に當り、そ

れから又千二百六十の年を數へると明治天皇の五ヶ條御誓文の發布に當るが、猶太の方でもユダ王國がバビロンのために亡國の憂目を見た紀元前六百六年から計算し、千二百六十の朝夕即ち二倍の數の二千五百二十年を數へると、それが丁度西曆千九百十四年に該當するから面白い。

そこで、明治天皇の王政復古は世界維新の神政復古の豫行とも見るべきものであるから、此間の四十七年といふ數にも意味が出て來るので、世界の大事といふものは幾百千年後でも大體の見當が附く譯である。

されば、日本の王政復古や、猶太のイスラエル同盟とか、シオン運動とかいふものを材料として世界の大事を吟味すると、西曆千九百十四年頃に天魔兩軍の決戦が始まるのではないか位の推量が付いて來る。従つて第十九世紀の末から、第二十世紀の始にかけて、世界の動向が甚だしく異常を呈して居ることに氣が附くから、天魔兩軍の決戦が極めて接近せることを感知する筈である。

一四
以て言ひ張つたのであるが、直接わが耳にははいらなかつたが某將軍の傳ふるところによると、専門家は余の四十二ヶ月説を以て最近軍事科學の進歩を知らざる素人論だと嘲笑した人があつたそうで、現に海軍の日高參謀の如きは公然と新聞紙上に半年説を唱へたのである。

然るに偶々英國のキチナー元帥が三年説を公表するや、我専門家は即座に彼を老耄元帥とさへ悪罵したほどであつたが、此神祕な天魔兩軍の決戦は干戈だけの戦争ではなく、世界統一、神政復古への凡ゆる方面からの戦争であつたから、軍事専門家の見識だけでは解釋が出来なくなり、學術上半年で終るべきものがトウノ、四年半となり、中歐に限らるゝ筈のものが世界的となつたのである。そして前に悪罵を浴びせられた老耄元帥は、流石は大英帝國の名元帥であるとの讃辭を受けたのであつたが、キチナー元帥の三年説はハルマゲドンの見地からではなく、英國の參加する以上少くも三年を續けねば英國に勝算がないと告白したのであるから、彼は老耄元帥でもなく亦

名元帥でもなかつたのである。

こゝで今を去る四千年以前に、埃及のギザに建立された大ピラミッドが、今日まで極秘に附して居つた体内の坑道圖を前にして、之を解説するバイブルのヨハネ黙示録第十三章の前半を一讀する必要がある。

われ海の砂の上に立て一匹の獸の海より出るを見たり。
之に七の首と十の角あり。

其角の上に十の冕を戴き、其首に僭妄の名を書せり。

わが見しところの獸、其形は豹の如く、其足は熊の足の如く、其口は獅子の口の如し。

龍おのれの能力と座位と大なる權威を之に予たり。

我れこの獸の一の首傷を受けて幾んど死んとする状なるを見たり。
その死んとする状ありし傷癒ければ全世の人これを奇しとして従へり。

龍その權威を獸に予へしに因りて人々龍を拜し、又その獸を拜し曰けるは、誰か此獸の如き者あらんや。誰か之と交戦をなしうるものあらんや。此獸大なる言と瀆す言とをいふ口を予へられ、又四十二ヶ月の間働をなすべき權を予らる。

かれ口を啓て神を瀆し、其名と其幕屋及び天に住む者等を瀆せり。かれ聖徒等と戦ひ之に勝つことを許され、又諸族、諸民、諸音、諸國を宰る權威を予へられたり。

地に住める凡ての人即ち世の始より殺され給ひし羔の生命の書に其名を録されざる者等は此獸を拜せん。

耳ある者は之を聴くべし。

凡そ人を虜にする者は己れ亦虜にせられ、刀にて人を殺す者は己れ亦刀にて殺さるべし。

聖徒の忍耐と信仰茲に在り。

即ち西暦千九百十四年から、千九百十八年にかけて、右の如き大戦争が全世界に演ぜられる次第であるが、此一匹の獸といふのは獨帝カイゼルであつた。七の首と十の角といふのは當時の彼の實力を示したもので、其首には僭妄の二字が録されてあるが實に其通り、彼れカイゼルは自己の野心を天の使命なりと偽はり、全歐帝國の政廳としてパレスタインの橄欖山上に建築した大厦高樓の天井には、キリストの使徒十二人の内に自己の肖像を加へたばかりか、皇帝旗を横にせねば門が通れないといふので、エルサレム城の正門であるヨツバ門を叩き壊さんとしたが、三教徒の反對に遇ふてこれだけは中止したけれども、その代りスグ傍の城壁を崩して新道を切り開いたほど彼は僭妄の振舞に出たのである。

而も彼の行動は豹の如く熊の如く獅子の如くであつて人間性を失つて居つたではないか、であるから龍即ち惡魔は彼を魔軍の總大將に任じたわけである。

而して彼は僭妄にも彼は天軍を代表するもの、如く、其軍隊に向つてデル・タハを叫ばしめた。デル・タハとは獨逸語で其日といふことで、即ち此戦争は天魔兩軍の決戦であるハルマゲドンであるから、汝等は天兵であるといふ意味を鼓吹したのである。斯くて彼は斯る冒瀆の語を口にしながら、四十二ヶ月即ち三年半は彼は常に勝者の地位を保つたのである。

實に彼は僭妄であつた。彼の武器は科學であつた。そして其戦術には公道も人情もなかつたのである。そして若し彼が最後の勝利の獲得者であつたとすれば、日本は果して今日あるを得たであらうか。然り、天佑であり、神助であつた。勝つた彼は倒れ負けた方が生き残つたのである。

聖徒の忍耐と信仰にありと聖書は結んで居るが、實は此大戦に参加したのは殆んど全世界の萬國であつたといふもの、此大戦を招來し又主役を承つて参加した國はといふと、奇々怪々凡て基督教國であつたのである。

そこで敵にも味方にも大疑惑の雲が漲つた。それは今日まで平和主義博愛主義を高く標榜して來て、此看板で外國に傳道まで試みた國々が、皮肉にも基督教國同志が古今未曾有の大戦亂を惹起し、史上無比の大惨虐を演じたので、虚偽文化、詐偽教化の厚化粧が剥ぎ取られて各國擧つて其醜態を曝露したからである。

之が敵の方が異教徒であつたら彼等は天軍を氣取り、傲然として神聖戦争を云々するであらうが、双方共に基督教國であつたから此ベテンは不可能となつた。

併し双方共虚偽を事とし來つた狐狸であるから、大體に於て舊教と新教との對抗となつて居る關係上、英佛側では獨塊側を六百六十六の魔軍であるとし、獨塊側ではデル・タハを叫んで天軍を氣取り、自分の方を正義なりと宣傳是れ努めては見たが、元來が双方共に狐狸の類で、何れも魔軍に屬するものであつたから、兩虎共に傷いて漁夫の利を懐ろにしてホ、笑んだのは猶太人であつた。即ち此戦亂で歐羅巴の列強を悉く完膚なからしめたからである。

尙ほ之に加へて此トサクサ騒ぎの最中に彼等は祖國奪還に成功したからである。
されば此世界大戦は其外観に於て、基督教が没落して猶太教が復活したといふ事にもなる故に金色燦然たりし十字架の權威は全く地に隕ちて、猶太のダビデ章が之に代つたといふ有様であつた。

要するに世界大戦は歐羅巴全洲の破滅であつた。そして同時に基督教全體の破滅でもあつた。ところが歐米に渡つたのは悪魔が偽造した基督教であつたことを忘れてはならぬ。

勿論、バイブル即ち聖書は基督教と共に歐米に普及されたが、歐米の基督教は聖書と同一軌道に進まなかつたばかりか、寧ろ逆行した事に氣を附ける必要がある。

さればこそ、同じ聖書が神學者の舌で勝手氣儘に曲説され、偽造基督教を正しきものゝ如く辯證されたのである。

斯くいふと、聖書の明文が人に由りて反對に説明さるゝ如きは有りうべからざるも

のとして異様に感ずる人もあらうが、明治天皇の五ヶ條の御誓文中の萬機公論の四字さへ、デモクラシイ政治家は全く反對の民衆論、公衆論又は輿論など、曲解曲説して、天皇政治と逆行する民衆政治の武器としたではないか。

一體現今の人間は、悪魔の奴隸となり切つて居ることに氣が附かず、我儘を悪魔の聲と思はず之を自主の自由の叫びの如くに信じて居るから、事毎に神意と抗争する癖がある。それほど悪魔は巧妙に人間を籠絡して居るのである。

こゝで一ツ悪魔が如何に巧妙に奸策を繞らして居るかの實例を擧げて見る。

天軍は常に公明正大なる陣容を以て魔軍に對し何等の權謀術數を用ゐぬに反し、魔軍は常に卑劣な奸策と偽計とに進退して居るから、天軍に屬する天兵又神兵は、其前額に天軍の徽章を附けて居る。

邑の中エルサレムの中を巡れ而して邑の中に行はるゝところの諸の憎むべきことのために歎き哀む人々の額に記號をつけよ（舊約聖書エゼキエル書第九章四節）

我儕の神の額に我儕が印するまでは地をも海をも樹をも傷ふべからずと
曰へり。われ印せられたる者の數を聞きしにイスラエルの諸の支派のう

ち印せられたるもの合せて十四萬四千なり。(新約聖書ヨハネ黙示録第七章三節)

然るに魔軍は卑怯にも此天軍を欺かんとために天軍と同様の徽章を同じく前額に附け
しめたところ、滑稽にも敵か味方が區別が附かなくなつたので、天軍に分らぬやう
右の手にも記章を附けさして、天兵との區別を明かにしたのであるから、天兵の徽章
は前額にしか附いてゐないが、魔兵は右の手にも附いて居る。

かれ衆人をして大小貧富自主奴隷の別なく或は右の手或は額に印誌を受
しむ、印誌すなはち獸の名あらざる者あるひは其名の數あらざるのは凡

て貿易することを得ざらしめたり。(新約聖書第十三章十六節)

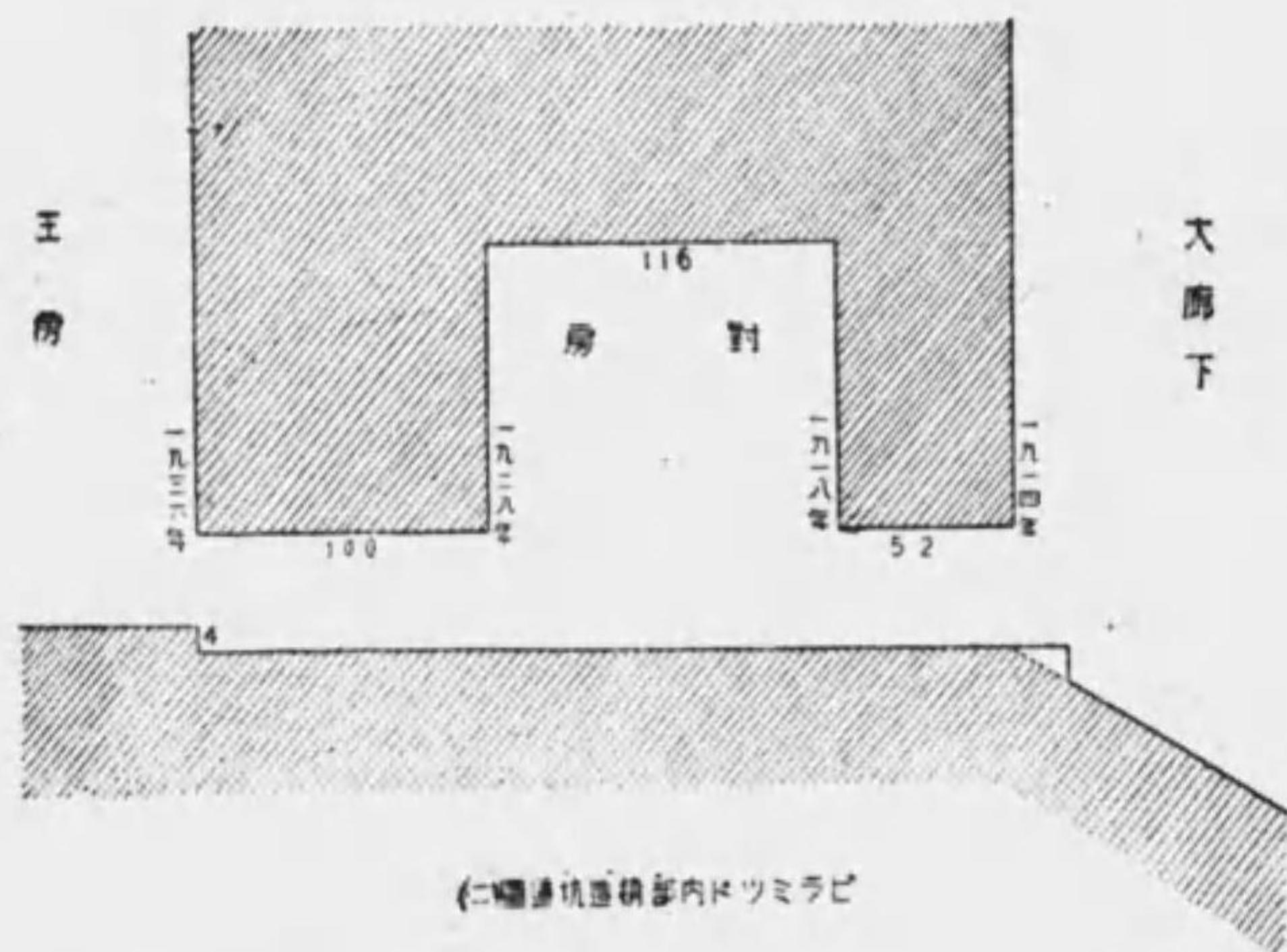
天軍を欺かんとために右の如き奸策を施したところが、其結果は反對に出で、天軍よ
り見て、右の手に印誌のあるものは凡て敵なり。前額の徽章に惑はされて躊躇する勿

れといふ號令が天軍に響いたから、魔軍は之で取返しをつかない失敗を演じたわけで
實際今日國際關係は愚か、國內にあつても亦一家にあつても、敵か味方の區別は全く
附かないほど混亂して居るので、表面の言行では到底判断が出来ないから、右の手に
印誌があるか、無いかを検査するより外にない。即ち天軍に屬する人は前額の徽章通
り少しも妥協性のない直線的一本調子であるから、和魂洋才だの、士魂商才だの融通
が利くの、如才がないのなどいふ連中は皆右の手に印誌のある人であるから油斷
してはならぬ。

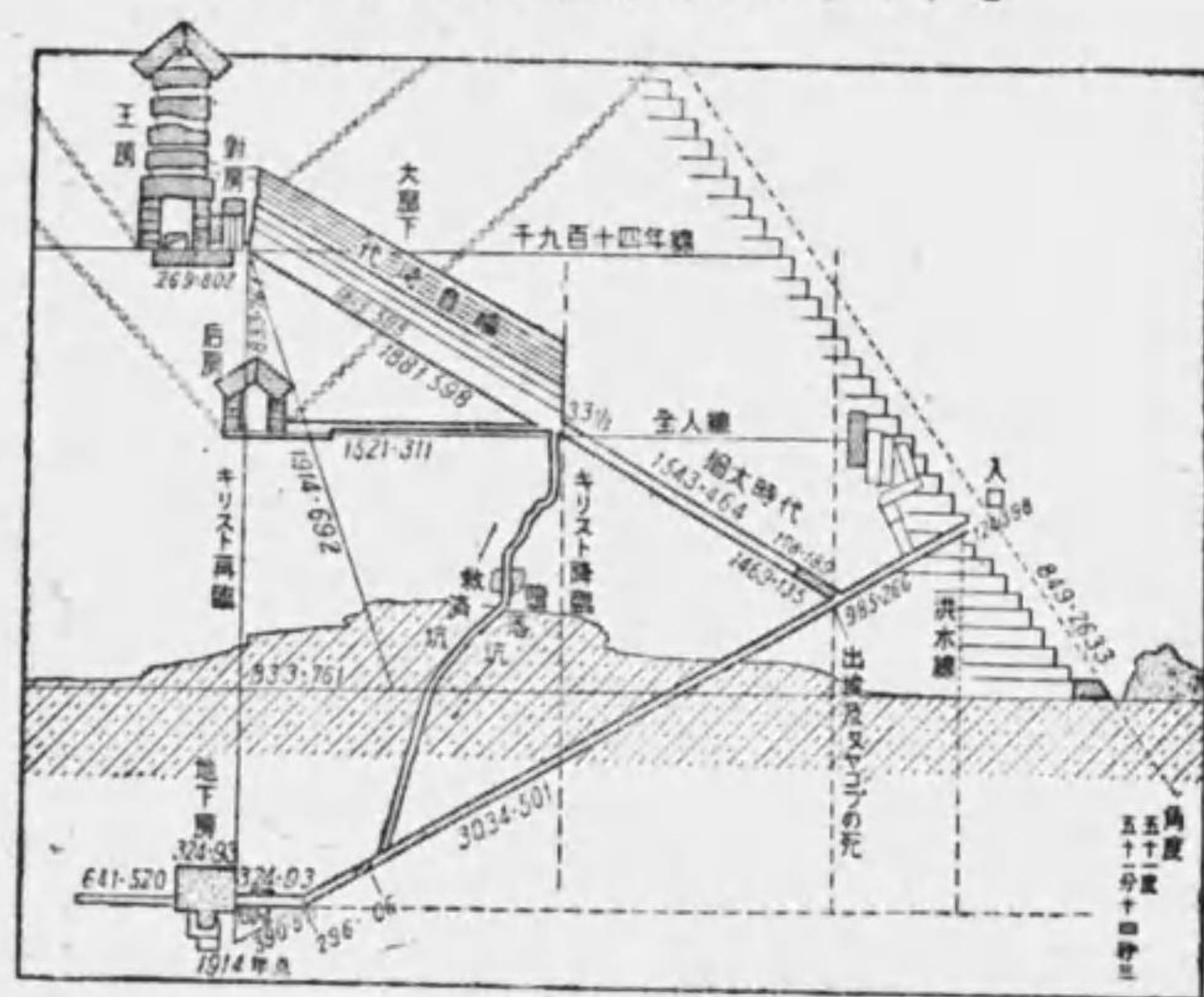
そこで、テオクラシイとデモクラシイで分けければ間違はないが、日本人に分り易く
言へば、君子は義に就き小人は利に就くの諺が宜しい。

然り、天軍は義で固まり、魔軍は利で結ばれてある。猶太の諺にも、義は國を高く
し、利は民を辱かしむといふて居る。然るに第一線に活躍して居る我忠勇の將士は一
人として利を考へて居るものはなく、皆義にのみ勇んで戦つて居るが、同じ軍人でも

ハマルゲンド名圖



(一) 圖道坑造構部内のドツミラビ



て見る必要があるが、ピラミッド体内の坑道圖を前に置いて之を説明する。

此坑道圖は世界人類史の大勢を設計したもので、二十六度十八分九秒の勾配で向上一路をたどつて來た世界人類史が千九百十四年に到るや其角度を急變して水平道に轉じたのである。而も今まで坑道とはいへ高さ七間ほど高い天井であつたものが、急に僅かに四尺ばかりの高さになつたために、何人といへども獸の如く四つん這ひにならなければ通れない事になつた。

支那側の方は如何なる主義のものであれ、悉く利一點張であつて義といふ觀念は少しも見出されないから、實に能く天魔兩軍を代表した戦争と言ひ得る。

斯くて世界が日本に味方するものと支那に味方するものとに由りて二分されるわけで、支那側に味方するものは悉くデモクラシイの走狗であるから自然滅亡の外はない。併し之は後期戦に屬するから次の幕で詳しく述べる。

右の如き豫備知識を以て先般の世界大戰即ち天魔兩軍の決戦の前期戦を回顧し

之が即ち西暦千九百十四年以後の所謂世相を如實に示したもので、今まで勝ち誇つて居つた西洋文明デモクラシーの行詰りの正體である。そして義に就くものと利に走るものが審判さるゝ第一裁判と見て然るべきである。

而して此坑道は長さ五十二ピラミッドインチになつて居るから、其期間は五十二ヶ月で、實に世界大戦の期間と一致する。

即ち大正三年七月二十三日に奥洪國對セルビアの宣戰布告があつて、五十二ヶ月目の大正十一年の十一月十一日に休戰條約が調印されたのであることを考へると何人といへども眞劍に身を處する必要を感ずるであらう。

之れで前期戦が終り、畢竟するに歐羅巴列強の破滅で此幕が閉ざされた。そして次に來るべき後期戦で、愈々世界統一の幕になるのであるが、其前に中入がある。

中 入

中入は芝居には無くてならぬものになつては居るが、筋書に載せねばならぬものではない。トいふて之を省くことも出来ない。何故なれば之は過去に對しての休憩であり、又將來に對しての準備であつて、見物人には倦きるほど幕合は長いが、舞臺の演者は殆んど休むひまもないのである。

此中入は大正十一年即ち西暦千九百十八年が將に終らんとする頃から始まつた。そして百十六ヶ月續くことになつて居る事は坑道圖の示す如くで、此間約十年世界は平和を克復したことになる。併し之は偽裝の平和であることは言を待たない。

而して此偽裝平和を急造したのは彼れ惡魔であつて、後期戦に對する十分の準備を完成するために、今や世界の平和は克復せりと鳴物入りで吹聴し、故に世界の萬國は軍備を縮減せよ、武裝を解除せよと疾呼した。

之がためには一方に平和克復日の世界の祝賀日たらしむるべく強制し、日本でもスツカリ之に籠絡されて、恰も大正十一年に當り、而も十一月十一日が其日であつたの

で一部の人は縁起を擔いで之を眞の平和が天降つたもの、如く讚美し、特に基督教會などでは「わが事成れり」といふ調子で此日を特別禮拜日としたほどであつた。

併し天魔兩軍の作戦を胸に藏めて居る人には之は芝居の中入であるから、之で芝居が終つたものではない位は心得て居る筈である。

然るに魔軍は、一方に於て平和來、平和來の歌をうたはせて人心を怠慢ならしめ、又他方軍備無用の運動を起して天軍の武備に缺陷あらしめ、而も魔軍は反つて軍備を擴大充實するが如く巧妙な計略を行つたのである。

神言ひ給はく、彼等わが民を惑はし平安あらざるに平安といふ。又わが

民の塙を築くにあたりて彼等灰土を以て之を煉る(舊約聖書エゼキエル書第十三章十節)

讀者試みに此中入の期間に全世界に實現した大事實のみを回顧しても能く此邊の消息が分ると思ふ。そして此期間我皇軍が魔軍の宣傳に乗せられて兵備を怠つて居つたとしたら今日の日本はドウなつて居つたらうか。

之がため當然必要であると信せられる陸海兩軍の豫算が何故に難産の憂目を毎年見せられたのであつたか、上下擧つて之を反省せねばならぬが、幸ひに天佑の加護に由りて皇軍の今日あるを得た事は我等の感謝に堪えない。

此中入は西暦千九百二十八年、わが昭和三年まで續いたので、今は已に後期戦に入り將に殆んど終らんとするばかりではあるが、順序として、此中入を利用し、大切に出来て来て最後を遂げる魔軍の正體をモ少し明かに知つて置く必要がある。何故なれば此大切には見物人といふものは一人もなく、皆舞臺に上つて一ト役を演せねばならぬ事に決つて居るからである。

われ果して天軍か、魔軍か、一つ淨玻璃の鏡のある部屋に入つて寫して見やう。

●聖句中()内は著者の解説なり

然るに彼等すなはち我等の先祖みづから傲り(個人主義を高唱)その項を強くして汝の誠命に聽従はず(自由平等民權を主張して天地の公道を無視す)聽従ふこ

とを拒み亦汝が其中にて行ひたまひし奇蹟を憶はず（人智人力以て科學萬能を叫び神智靈覺を嘲笑す）還つてその項を強くし悖りて自ら一人の首領を立て（個人主義を高唱しつゝ、多數決にて大統領を選擧す）その奴隸たりしところに歸らんとせり（自由平等民權を叫びつゝ、悪性の專制政下の奴隸となる）

（舊約聖書子へミヤ書第九章十六節）

以て今日デモクラシイと稱するものが如何に神意に逆ふかを知るに足らんが、然らば斷末魔に於ける天軍の利劍が如何に閃き、魔軍の敗退が如何に悲慘であるかを左に明示する。

萬軍の神言ひ給ふ。

劍よ起きて我牧者我伴侶なる人を攻めよ（萬國萬民の假面を剝す）

牧者を撃て然らば其羊散らん。（偽善の指導者を撃ち其迷信者を解放す）

われまた我手を小さき者の上に伸ぶべし（天は高くして尙ほ卑きに聽くの意）

神言ひ給ふ。全地の人二分は絶れて死に（日本を除く世界萬民の三分の二は滅ぼされ）

三分の一は其中に遺らん。

われ其三分の一を携へて火に入れ、銀を吹分くるごとくに之を吹分け、金を試むる如くに之を試むべし（精煉の意）

彼等わが名を呼ばん（主一信仰一バプテスマ一に歸る）

われ之に應へん。われ之は我民なりと言はん彼等またエホバは我神なりといはん。（天に二日なく地に二王なきをいふ）（舊約聖書ゼカリヤ書第十三章七節以下）

基督教でいふエホバ神、即ち猶太教のヤーエ神は、日本では八幡神に該當するのであるが、此方面の説明は別冊で述べることにし、然らば天軍は如何なる姿で現はれるかを明示する。

茲に一人の王あり、正義をもて統べ治め、その君たちは公平をもて宰らん。

(舊約聖書イザヤ書第三十二章一節)

われ東より驚(神軍の義、奇妙にも皇軍の航空隊は誰いふとなく荒鷲と呼ばれて居る)を招き、遠國より我が定めおける人を招かん。われ此事を語りたれば必ず來らすべし。我れこの事を謀りたれば必ず成るべし。
汝等 心頑にして義に遠ざかるものよ、我に聽け。われ我が義を近づかしむべければ其來ること遠からず、わが救おそからず、われ救をシオン(日本)に與へ、わが榮光をイスラエル(神選民族)に與へん。(舊約聖書イザヤ書第四十六章十一節以下)

第參幕 其後期戰

ヨハネ黙示録第十三章を見ると、此中入は一つの〇になつて居る。そして十一節から後期戰の筋書になる。

われ又一匹の獸の地より出づるを見たり。

之に二の角ありて羔の角の如し、

且其言ふこと龍の如し。

この獸先の獸の前にて先の獸の凡ての權威を執り、地と其上に住める者をして先に死んとする状なりし傷の癒えたる獸を拜せしめたり。

また大なる奇徴をなし人々の前にて火を天より地に降し、且その權を得て獸の前にて行ふところの奇徴を以て地に住む者を欺き、彼等に語りて彼の刀傷を受てなほ活る獸の像を作らしむ。

彼この獸の像に生命を予へ、之をして言ふことを得しめ、又その像を拜せざる者を悉く殺さしむるの權を予へられたり。

彼衆人をして大小、貧富、自主、奴隸の別なく、或は右の手或は額に印誌を受しむ。

印誌すなはち獸の名あらざる者あるひは其名の數あらざる者は凡て貿易することを得ざらしめたり。

此獸の數目の義を知ものは智慧あり。才智あるものは此獸の數を算へよ。獸の數は人の數なり。

其數は六百六十六なり。

前期戦で現はれ出た一匹の獸は獨逸のカイゼルであつたことが想像しても難くはないが、六百六十六の數が其名を暗示して居ること、余は偶然次の如き解説を案出したのであつた。

K.....	11
A.....	1
I.....	9
S.....	19
E.....	5
R.....	18
	— 63

即ちアルファベットの序列數でカイゼルの名を計算すると、六十三となるが、前にも述べた通り悪魔は常に表裏兩面を有して居るから、前から見ると六十三と、後から見ると六十三とを、三が中央で重なるから六百六十六となる。

然るに此計算は歐羅巴のアルファベットのみでなく、日本の「いろは」で試みるも同様であるから不思議である。

か.....	14
い.....	11
ざ.....	37
る.....	11
	— 63

聖書にはカイザルと書いてあるから右の如くカイザルで數へたのであるが、試みに目下日本が懲膺して居る支那はドウであるかといふに、英語のチャイナでは三十五に

しかならぬが、チャイニースとすると六十三になる。

C.....	3
H.....	8
I.....	9
N.....	14
E.....	5
S.....	19
E.....	5
	— 63

これなどは大に興味あることだが、日本の「いろは」では支那が見事に六十三になるのであるからバイブルから見ても支那は魔國であらねばならぬ。

然らば今後期戦に出場する六百六十六に該當する一匹の獸は果して何國を指して居るかといふに、此後期戦は前期戦と異り、以て世界統一の大任を負ふべき國を決定することになるのであるから、一層緊張された場面になるので、前期戦は準決戦の如くにも考へられるのである。

而して前期戦の結果として後期戦に出場しうる選手國を吟味すると、土附かすの日本と、不戦一勝の米國とが東西に残されたのであつて、ツマリ此兩選手國の勝負

となるわけではあるが、能く注意すると奇妙にも此兩國は何もかも全く反對の國柄である事左の如くである。

日本

- 世界最古の國
- 神勅天爲にて成長せる國
- 天皇政治の國
- 神の言の葉の言擧げせぬ國
- 義のために死する國
- 國字あり國語ある國
- 東半球の一小島國
- 太陽の國
- 他國に歸化せぬ國

米國

- 世界最新の國
- 反逆人爲にて建造せる國
- 民主政治の國
- 人意民論の自由國
- 利のために生きる國
- 國字なく國語なき國
- 西半球の一大陸國
- 星の國
- 他國に歸化する國

他國人を同化する國

文物を復活せしむる國

他國人を同化せぬ國
文物を腐敗せしむる國

三八

右の如く主要な國情でさへ相違して居るから、枝葉に亘る一切のものも亦相違して居る筈で、此兩者を握手せしむるが如きは已に天則違反である。故に余は大正初年から日米戦争は天の命令なりと大聲疾呼し、遂に必要に迫られて大正十三年に「進んで米國を敵とすべし」と題する小著を公にして全國に警告したが、余の警告は今日眼前に實現されたのである。而も其事がバイブルに明記されて居るのである。

一見小羊の如く其言ふところ龍の如き怪物とは、即ち基督教國を標榜する惡魔の國といふことで、虚偽、偽善と金錢萬能藥で全世界を俗化せしめたのみならず、前額にデモクラシイの記章なく、右手にフリーメーソンの印誌がない國に對しては「凡て貿易することを得ざらしむ」即ち今の經濟封鎖である。

尤も今のところ、目の前で經濟封鎖で日本を苦めつゝあるのは英國になつて居るが

前期戦で歐羅巴の列強は何れも自滅の状態にあるが、此自滅した實力なき國を相手に敵とする必要もなく、亦味方とする必要もない筈で、日本は超然として獨り高く神に近く國位を保つべきである。

されば、支那が敵だの、ロシアが敵だのといふことは井底の蛙式の見解で、自由主義や社會主義や、赤化運動やコミンテルンなど、狭く敵を考へてはならぬ。勿論左傾だの右傾だのといふ錯覺から斷然覺醒して、唯天皇政治と民主政治、即ちテオクラシイとデモクラシイに世界の一切を二分して敵味方を定むべきである。

聖書に所謂、山羊と綿羊とを右左に別けるといふのは此事で、明るい世界となるか暗い世界になるか天下分け目の大決戦、それが今我等が眼前に目撃して居る後期戦である。

然らば何故に英國が當面の敵陣に現はれ出したに係はらず、彼れ米國は嚴正中立の椅子から腰を上げないかといふと、そこが巧妙な奸策で、世界大戦の時のウイルソン

大統領も同じ奸策を廻らしたではないか。

であるから直接に日本に敵對して居る支那やロシヤは實は何者にか操縦、教唆されて第一線で躍つて居る馬鹿者に過ぎない。能く見ると其後方に歐羅巴の落武者が、而も腰がぬけて自分で立てない二つの國が綱を引いて居り、又其後方に之を指揮して居るのが、同じく六百六十六に該當する後期戦に現はれた怪獸である。

勿論、日本は未だ天軍の代表國なりてふ自覺までに到つて居らないために、不見識な辯明や、低級な申譯などをしては居るが、敵國といへども、マサカ魔軍の代表國とは公然聲明するまで圖々しくはなつて居ない。併し此後期戦は今後三年で終るのであるから、多分來春あたり兩軍共に極めて鮮明に其軍旗を高く翻へすことゝ信ずる。

そうなると世界の萬民は大義名分を明かにするの外はないことになるので、何國民とか、何民族とか、何教徒とか何政黨などゝ區別する必要はなく、天軍に就くか、魔軍に就くかといふことになるから、天軍に就けば自然日本側に參加することになり、

魔軍に就けば否應なしに日本に敵對することになる。

そこで、當面焦眉の問題として、日本は先づ第一に天皇政治の本色を十分に發揮せねばならぬが、天皇政治に逆行するデモクラシイの臭味を各方面に於て之を一掃するがためには、所謂大義親を滅するの果斷決行亦已むを得ぬことである。

然るに今日の我國民は天皇政治(テオクラシイ)に對しても民主政治(デモクラシイ)に對しても正しき認識を缺いて居たので、吳越同舟の恨みが到るところに實現され、従つて敵味方の區別がハッキリしない。故に此際少しも雲のない眞の日本晴を實現せしめねばならぬ。

而して世界萬民が中空に太陽を拜むが如き氣分で日本の正體を仰ぐやうにせねばならぬ。併し之は議論ではない、武力でもない又買収でもない、何人も否定し得ず、又是認せねばならぬ事實を以て示すべきで、談判も必要なく、宣傳も必要なく、永い間デモクラシイの妖雲に閉ざされ、天日爲めに光りなかりし暗黒世界に、東天紅の鷄鳴

に世界萬民の迷夢を破つて、日本晴の朝日を拜ませるだけの話である。

回顧すれば僅かに十餘年前の事である。我軍人が白晝電車内で労働者に侮辱されて世人之を怪ます、軍人の妻になる處女が跡を絶ち、士官學校の入學志願者が定數に充たぬといふ時代もあつたが、之れほどまで國體覆滅運動が我國に横行して居つたに係はらず、其後天下の形勢俄然として急變し、遂に今日を見ることになつたことを考へると、今更何も心配する必要もないことではあるが、モ少し日本の一切を神化せしめねばならぬことを祈願の最中、有難き事かな去る神嘗祭の當日、畏くも天皇陛下に於かせられては時局に對する大御心から、全國十一萬の官國幣大社以下各神社に於て中祭を執り行はしめられ、陛下親しく宮中三殿、神祇祖宗の大前に於て時局に關する御祈願あらせられたと拜承するが、斯くの如きは全く御異例の由にて、今次の支那事變を如何に重大視せられ給ふか實に恐懼の極みと申上げねばならぬ。それほど我日本は刻々に神化されつゝあるのである。

然るに之に反して、ロンドンでは、從來の聖書をモ少し面白く讀ませたいといふので、之を小説體に改訂しやうといふ運動が始まつたそうであるが、之は一切の俗化を代表したもので、義と利との色彩が各々濃厚になつて來た。

之に加へて、一時は歐羅巴全土を擧げてデモクラシイの席捲するところになつたかと思はれたが、奇妙にも伊太利にファツシヨ、獨乙にナチスが飛び出して歐羅巴洲の内亂を惹起した。

それから北米合衆國だけは徹頭徹尾デモクラシイの大本山で、世界を眼下に見下すものと信じられて居つたが、不思議にも大學學生間に意外にも專制政治期成同盟が結ばれたなどは餘りに不思議である。

そればかりではない。之と對照して、然らば我日本の大學生はメイデイの歌でも歌ふのではないかと思はれたに、今日では舉國一致の名目の下に赤化も左傾も無くなつたのである。實に奇妙の現象で、時が進むに従ひ、天軍の結束は益々強固になり、魔

軍の内訌は愈々増大されることを見通してはならぬ。

そこで、此後期戦は何年で終るかといふに、ピラミッドの示すところによれば、此期間は百ヶ月であるから、千九百二十八年（昭和三年）から始まり、千九百三十六年（昭和十一年）で終つた筈である。

坑道圖解の如く、第二の坑道即ち後期戦は千九百三十六年で坑道が盡き、已に一歩王房に足を入れた筈であるのに、世界の事實はマダ統一には到らないのは何故であるかといふに、ピラミッドの坑道の終點から、王房の床上に足が達するにはマダ四ピラミッドインチあるのが分る。ツマリ四ピラミッドインチだけ床が高くなつて居るのである。

そこで、之で後期戦の攻撃戦は終つたが、今は其追撃戦であることが分つて来る。そして此追撃戦は千九百四十年、即ち昭和十五年で終るわけである。

宜なる哉。此昭和十五年は、實に神武復興皇紀二千六百年に該當する年であるから

我日本では世界大博覽會が第一に計畫されたところへ、オリンピック東京大會が之に加はり、次いで數へ切れないほどの國際會議が日本で開催することになつて居るから實際日本に渡來する外國人は十萬位としても、之がために世界萬國萬民が日本を中心に其注意を集中することを考へると、世界統一の序幕としては正に適當なものと言ひうるではないか。

斯くいふと、大抵の人は日米戦争はマダ始まつて居らぬ、もし始まつたとすれば今後で、早くも五年か七年後でなければ終らぬだらうということであるが、天魔兩軍の戦争は武力のみものではないことを第一に頭に入れて置かねばならぬ。

であるから日米戦争といふものはマダ始まつては居ないが、テオクラシイとデモクラシイの戦争は明治維新の王政復古と殆んど同時に我國内に演ぜられたのであつたが外國文物崇拜時期であつたために、毒か薬かの見分けが附かなかつた。そして折角の王政復古と全く逆行する自由平等などが叫ばれたのみならず、民選議院の建白となつ

て遂にデモクラシーの横行に委せたほど、皇軍利あらずであつたのである。併し武力の戦争でなかつたために、國民が氣が附かなかつたとはいへ、此政治的侵略は黒船以上、我が國運を脅かしたことを忘れてはならぬ。

由來日本人は戦争といふと武力戦とのみ思ひ過ぎるので、思想戦などには殆んど興味を有つて居らぬ、假令思想戦と分つて居つても思想は思想を以て戦へといふ癖がなく、直ちに何事も武力で解決するといふ癖があるので、思想の侵略と分つても武力に訴へる時を待つて見たりしたために、明治の初年から最近までデモクラシーの爲すまゝに任せ、遂に國運將に危からんとしたのであつた。

されば天魔兩軍は我國内で過去八十年に亘り可なりの露骨な激戦を演じたのであつたが、頼山陽の下筑後川の詩にある如く、當時國賊（デモクラシー）鴟張を擅にし、七道風を臨んで豺狼を助くる有様であつた。猫も杓子もデモクラシーにかぶれ、神化すべき筈の國と國民とは口癖の如くに民衆化を叫んだのであつた。

天壤無窮の神勅で、天地の公道上に形した日本が、民衆化を口にするが如きは根本的墮落である位は何人も知つて居なければならぬ筈であるが、侵略者を開國の恩人と思ふたほど外國崇拜の結果、和魂洋才などといふ新熱語を勝手に私造して墮落を開化なりと強辯したのである。

されば武力に由る日米戦争などを云々するが如きは時已に遅しで、天魔兩軍の決戦は已に終り、目下追撃の最中であることを忘れてはならぬ。

追撃であるから天軍は勝つたのである。そして追撃は敵を全滅することであるから戦争の氣分を弛めてはならぬ。

而して此追撃を阻止するものあらば、凡て之を敵として戦ふべきである。されば全世界を擧げて此追撃を阻止するが如き態度に出ても、宜しく全世界を敵として戦ふべきである。但し世界の半分は天軍に参加するのが已定の事實であるから、孤立などと悲觀するが如きは禁物である。改めて言ふ、天魔兩軍の攻撃戦は已に昨年で終つて、

今は天軍の追撃戦となつたのである。

試みに敵國と思はるゝ凡ての國々を見渡すと、何れも通足の姿勢にあるではないか。そして一國として真劔になつて皇軍に敵對せんとするものは見當らないではないか。聽け街上に響く軍歌の聲。

天に代りて不義を討つ
忠勇無双の我兵は
歡呼の聲に送られて
今ぞ出で立つ父母の國
勝ずば生きて還らじと
誓ふ心の勇ましき

恰も此時、大本營が突如唇氣樓の如く出現した。愈々テオクラシイの天下が近づいたのである。

× × × × × × ×

第四幕 其 凱 旋 (大切)

天魔兩軍の決戦ハルマゲドンが果して何軍の勝利に歸するかは不明であれば、假令魔軍でも勝つ方に與みしたいのが人間の慾である。併し魔軍が勝つやうなら世界は闇である。芝居でさへ勸善懲惡で、善玉が榮えて目出度し／＼で終つて居るから、天軍が勝つのは誰でも推量されるが、之が已定の事實になつて居ないと信仰の道が成り立たなくなる。

由來、義に就くといふことは苦むことを覺悟した上の話で、利に就くといふことは樂をしたいたい慾望からである。

聖書にも「聖徒の忍耐と信仰茲にあり」と録されてあるのは、最後の勝利を樂んで惡戦苦闘せよといふ意味である。ツマリ後で樂する代りに今苦めといふのが天軍で、後で苦んでも今樂したいといふのが魔軍である。

斯く考へても天軍が勝つわけで、又今日までの地上の事實が、古今東西を問はず、必ず善悪正邪曲直の勝敗は確定されてあるから、教育も宗教も、政治も生活も眞剣に考へられるので、然らざれば人間界は野獸化する外はない。

併し人間が天軍の勝利を信じて、果して其通りに實現されるかドウかを神智靈覺に窺つて見よう。世界の太勢を豫言したピラミッドを調べると、坑道の終點に王房と稱する一室がある。

天井は五大洲を表はした五重になつて居り、中央には人文の淵源である神祕の石櫃が置かれてある。そして此王房の天井は、ピラミッドの絶頂にある太陽石と相通じて居るから、此王房は太陽系の機構で設計されて居る事が分る。故に太陽に直屬した國及び人が此王房に進み入る資格があることが自然に分るから、此王房には日の旗が飾られるか、星の旗が飾られるか位は兒童にも見當がつくではないか。

而して此王房を猶太教ではシオン（ヘブライ語ではチオン）と呼び、基督教では天

國、神の國又は千年王國と呼んで居る。そこで此王房と石櫃とを詳細に考查すると今後世界統一神政復古實現後の新世界の一切が明瞭に分るのであるが、それは今マダ説明する必要が無いから言はぬ。唯天軍の凱旋の模様だけを茲に述べて置かう。

われ觀しに羔シオンの山に立てり。

十四萬四千の人は是と偕にあり。

皆その額に羔の名をよび羔の父の名を書せり。

われ天より聲あるを聞き。衆の水の聲の如く、大なる雷の聲の如し。

わが聞きし此聲は琴を弾く者の琴の音なり。

かれら新しき歌を寶座の前および四つの生物と長老等の前に歌ふ。

此歌は贖はるゝことを得て地より來れる十四萬四千人の外は學び得ることなし。

（新約聖書ヨハネ黙示録第十四章一節以下）

羔といふのは聖書ではイエス・キリストの事であるが、日本人に分り易く換言する

と月世見尊（ツキヨミノミコト）の事である。

此月世見尊がシオンの山の上に立たせ給ふたとあるのは朝日直刺し夕日照る日本の國の高天原に現はれ給ふたことで、十四萬四千の人数は即ちエズラ民族である神の選民之を代表して猶太人といふ、其人数が月世見尊に引率されて參朝したわけで、ツマリ凱旋式である。而して此十四萬四千といふ数は十二を十二倍した百四十四を唯數多く言ひ現はしたもので、神選民族全部と見て然るべしである。

されば此十四萬四千の軍勢の徽章はと見ると、羔の名および羔の父の名を書せりとあるが、之は天孫民族章の☆で、之で猶太人が此☆を國章として居る理由が分つて来る。勿論此凱旋式に參加してゐるのは神選民族エズレル人ばかりではない。エズレル人でもデモクラシイ化した魔軍の味方は皆滅ぼされ、敵國の中にも正義公道を擁護するものは、之に參加する特典を受けるわけである。

事茲に到ると天下分け目の其日其時で、何等の情實なしに山羊（魔兵）と綿羊（神兵）

とが間違なしに左右に區分されるのであるから、一家を擧げて之に參加する家もあり、一家を擧げて滅ぼさるゝ家もあり、同じ家にあつても夫婦兄弟親子が左右に分離さるゝ家もあり、國としても同様であるが、面白いことには日本人と猶太人だけは、斯ういふ場合には不思議に一致する國民性があるから、假令全部ではなくとも、概して此凱旋式に參列しうるのは明かであるが、其外の國と國民とはソウは行かない。

それが毎日の新聞でも特筆されて居るが、日本以外の何れの國も、猶太人以外何れの國も、猶太人以外何れの民族も、イザ鎌倉となると必ず四分五裂の内訌内亂を惹起すものであるが、其内で比較的結束して居るのは矢張專制政治の獨伊兩國位なものである。併し之れとても幸ひに政權が天軍に屬して居るだけのこと、民衆の中には内亂の機會を窺つて居るものは、決して少しとはしない。

斯く述べ來るうちに、今迄沈黙して居つたローマ法王廳が反共產主義の立場から日本を支持すると聲明して全世界の天主教徒の結束を促がしたので、天主教徒の存在す

る國は到るところ一種の内亂を構成したわけで、而も之に加へて、米國內に驚くべき神秘運動が突發した。

五四

それは去る八月に日本に於て開かれた第七回世界教育會議の名議長として好評を博した、ニューヨーク世界聯合教育會長であるモンロー博士が「正義公道の日本を認識せよ」と獅子吼し全米國に講演行脚を敢行するといふことで桑港教育局次長マクレイ氏も博士に呼應するとの事である。

斯くの如き神變不可思議の神秘事實が今後三年間湧くが如くに躍り出すであらうが同時に魔軍の影が自然に薄らぎ行くことは勿論である。そしてオリムピックがドウであらうと、日本は世界萬民の憧憬するところとなるは何人にも容易に窺知さるゝことで、現に十年前までは觀光團しか來なかつたが、近頃は之は見學團に代つて來た。そして近き將來に必ず參拜團に代ることであらう。そうなるは無爲にし化すといふ次第で、日本天皇が自然に世界に君臨さるゝことゝなるではないか。之が即ち世界の大勢

で何者も之を否拒することは出来ぬ。而して之が天の命令であるから當事者は唯直立直行すればよいのである。誰にも何國にも何の遠慮することはない。

ところで右の凱旋式に天孫民族の事が書いてないがと怪む人があるかも知れないが元來バイブルは五大洲月の國の人民に與へられたもので、天孫民族には必要はないのである。それにシオンといへば日本の事で、日本といへば、天孫民族は自づから其國の中に包まれて居る。言はゞ天孫民族は軍旗中隊のやうなもので、又近衛兵のやうなものであるから、此處には特に記す必要はないが、讀者は已に知る如く、此天魔兩軍の大決戦は默示録の第十三章に録されてあつて、凱旋式は第十四章にあるが、第十二章には即ち天軍の總司令官ともいふべき大元帥の御事が録されてあるから一讀されたい。

其子鐵の杖をもて萬國の民を主理らんとす。彼れ神と其實靈の下に擧げられたり。此嬰兒が成人されてハルマゲドンの凱旋將軍となられたのであるが、其凱旋の時の

五五

御英姿を仰ぎ奉ると左の如く拜見される。

われ又天の闢くを觀しに一匹の白馬あり、之に乗れる者忠信また誠實と稱へらる。彼は義を以て審判と戦争をなせり。其目は火炎の如く、其首は多の冕を冠れり。又録せる名あり、彼の外に之を識る者なく。かれ血に染みたる衣を纏へり。彼の名は神の言といふ。天にある諸軍曰く輝ける細布を着、白馬に乗りて之に従へり彼の口より利劍出づ、之を以て列國の民を撃ち且つ鐵の杖を以て列國の民を牧らん。(默示録第十九章十一節以下)

白馬は日本では神馬と呼ばれて居ることは誰でも知つて居るが、其名は神の言といふとあるに到つては唯驚くの外はない、スメラミコトの御名が全く之に一致して居る。又鐵の杖は天之逆鋒を聯想させるが、天之逆鋒は余は多年テオクラシイ(天皇政治)の象徴なりと力説し來たつた事である。

而も天之逆鋒は神武であつて干戈の義ではなく、神の言、神の道、又神の義を地上に行ふことを意味したもので、上御一人の外之を執るべからずといふことから、柄が上になつて居る。若し民衆が之に觸れば直ちに怪我することになる。然るにデモクラシイは之と反對に柄が下に刀が上に向いて居るので、民主政治は當然神政への反逆を言明して居ると見るべきであるから、天軍の神兵は忘れても參政權などと口走つてはならぬことである。

斯くて此最後の大切幕はアト三年で終るのである。全體で百ヶ月即ち八年半のころを已に五年半を演じ終つたのであるから、無論善玉の勝利は確實となつて、今は追撃であるから、天軍に屬するものに取りてコンナ痛快なことはない。但し此幕では見物人は一人もないことは前述の如くであるから、各國各人悉く、舞臺の上に出演して居る事を忘れてはならぬ。尙ほ更に自國及び自分は天軍に屬して居るのか魔軍に屬して居るのかを明かに知つて居らねばならぬ。併し今日になつて急に悔改したからといふて時已に遅しで、唯王房に參加しうるか地獄房に投げ込まれるか

の審判の時を待つ外はない。而して之は積善の家には余慶あり、積不善の家には余殃ありで、今更ドウすることも出来ぬ事である。

これが天魔兩軍の決戦であり、世の終末のハルマゲドン即ち天下分け目の戦争で、此後千年間地上は絶對の平和境とされて居る。

斯くて世界は統一され神政は復古されるのである。

われ新らしき天と新らしき地を見たり。

先きの天と先の地は已に過ぎ去り海も亦有ることなし。

われ聖城なる新らしきエルサレム備へ整ひ神の所を出で天より降るを見る。

その状は新婦その新郎を迎へんために修飾たるが如し。

われ大なる聲の天より出づるを聞けり。云く、神の幕屋人の間にあり。

神人と共に住み、人神の民となり、神また人と共に在して其神となり給ふなり。

神かれらの目の涙を悉く拭ひとり復た死あらず。哀み哭き痛みあることなし。

蓋前の事すでに過ぎ去ればなり。

われ靈に感じ、天使に携へられて大なる高山に至れり、こゝにて我に大なる城、

聖エルサレム神の榮を以て神の所を出で天より降るを示す。

其城の光り輝くこと至貴き玉の如く、澄とほる金剛石の如し。

これに大なる高き石垣ありて十二門あり。其門に十二の天使をれり門の上に名を書せり。イスラエルの十二の支派の名なり。

われ城の中に殿あるを見ず。そは主たる全能の神および羔その殿なればなり。

また城に日月の照らすことを需めず。そは神の榮光之を照し且羔城の月燈なればなり。

萬の國の民この光によつて行まん。

地の諸王おのれの榮と、尊貴とを以て此城に來らん。

その門は終日閉ぢず。こゝに夜あることなし。

萬の民おのれの榮と尊貴とを以て此城に來らん。

凡て潔からざる者と、憎むべき行をなす者、或は謊をいふ者は必ず此に入ることを得ず。

唯羔の生命の書に録されたる者のみ入るなり。(默示録第二十一章)

エルサレムとは平安城の事で、新世界を示した名であるが、羔即ちキリストを月燈と呼んで居るのに特に注意すべきで、之は月世見尊の事である。そしてシオンはエルサレムの區畫外に別にあつて之は日本である。故に斯くて月日を合せたる全世界は天照大神の治下に復歸することとなるのである。

昭和十二年十一月二十日 印刷
昭和十二年十一月二十五日 發行

【定價二十錢】

著者 酒井勝軍

發行者 古賀治朗
東京市世田谷區代田二ノ一〇五一

印刷者 川橋源三郎
東京市京橋區築地一丁目十四

東京市世田谷區代田二ノ一〇五一

發行所

神祕之日本社

振替東京一二三九四番

猶太の七不思議

猶太は世界の謎である。
その歴史は不可思議にみたまされてゐる。
本書は酒井先生が猶太研究の過程に於て
指摘したその七不思議であるが、この謎
の民族こそ今や日本の神祕と相應じて世
界の動きに重大な役割を演じてゐる。
此際混沌として其歸趨を辯せざる世界問
題を正しく認識せんとするものは、まづ
神祕日本の研究と不可思議猶太の正體を
知らなければならぬ。
(定價一圓)

酒井勝軍先生著

發行所

國教宣明團

東京市世田谷區代田二の五一
振替東京七四四六九番

月刊「神祕之日本」

「ハルマゲドン」をお読みになつた方々へ

單行本でなくとも、かゝる興味ある資料と、時局を新しい角度から見る人智
を超越した學說とを満載したる研究雑誌『神祕之日本』が酒井先生主筆のも
とに發刊されてゐます。

この小冊子によつて日本の世界的使命を自覺し
日本國の神祕性と今後の世界動向について尙一
層の研究を深められんとする方々はまづ本誌の
誌友として御愛讀御研究下さい。

酒井勝軍先生主筆

發行所・東京市世田谷區代田二丁目一〇五一
神祕之日本社・振替東京二二三九四番

毎月一回一日發行
定價一冊三十錢
半年一圓八十錢
一年三圓六十錢

△御申込は直接本誌へ上記振
替御利用御申込下さい。

終